愛光NEWS
2024年10月

２０２４（令和６）年１１月３０日発行
（編集）愛光本部
（TEL）０４３－４８４－６３９１
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

10月31日、はちす苑の千田ホールにて「ファミリーフェスタ」が開催され、多くの職員とそのご家族が参加しました。
イベントでは、今年度入職した職員による自己紹介とあいさつ、昨年度永年勤続表彰を受けた職員の紹介が行われました。また、実行委員が準備したゲームなどもあり、参加者全員で楽しむことができました。
ここ数年はコロナ禍の影響で法人の新年会が開催できない状況が続いていましたが、今回のファミリーフェスタを通じて、久しぶりに楽しく和やかな時間を共有する機会となりました。

□事業経過など（2024.10.1～）

1	火	業務執行会議
3	木	全国知的障害福祉関係職員研究大会/職員健診/はちす苑業務改善WT
4	金	全国知的障害福祉関係職員研究大会
5	土	秋まつり
7	月	全国盲重複障害者福祉施設研究大会
8	火	全国盲重複障害者福祉施設研究大会
9	水	全国盲重複障害者福祉施設研究大会 コ・ヒューマンフォローアップ /子育て応援WT
10	木	ともいきプロジェクト
11	金	ネットワーク構築WT /70周年記念式典WT
14	月	はちす苑業務改善WT
16	水	地域食堂ともいき
17	木	3年目交流会
21	月	テクニカルスキル研修/入退所WT
22	火	佐倉圏域実績会議
23	水	地域福祉事業部実績会議
24	木	障害者支援事業部実績会議/高齢者福祉事業部実績会議/財務ビジョンPT
30	水	内部統制構築PT
31	木	ファミリーフェスタ

■月報から

□愛光秋まつり　　　（ルミエール）

5日に「愛光秋まつり」が開催されました。事前に家族会で「ぜひご来場ください」と呼びかけた結果、30 名もの利用者ご家族が来所してくださいました。いつも面会に来られる方から久しぶりに訪れたご家族まで、多くの方々が参加し、利用者と一緒に会場を回りながら楽しい時間を過ごしていただきました。

会場は大変な賑わいを見せ、秋まつりの雰囲気を十分に楽しみながら、ご家族と利用者が食事や飲み物、デザートなどを購入して笑顔でルミエールに戻ってくる様子が印象的でした。なのはな広場には多くのテーブルと椅子が用意され、ゆっくりと食事を楽しめる場となり、ご家族からも好評でした。

ご家族と利用者が面会する機会が減少している中で、この秋まつりを通じて笑顔溢れる交流の場が実現できたことを大変嬉しく思います。

（ルミエール課長　原　宏之）

□秋まつり ～日中活動班奮闘記～　　　（めいわ）

5日に秋まつりが開催されました。自主生産活動を行う「手工芸創作班」と「農耕班」は、この日の販売に向けて準備に励みました。

手工芸創作班の挑戦

手工芸創作班は、機織りで作るコースターや紙漉きで作ったポチ袋、油吸収パットを販売しましたが、今回は初めてカレンダー制作にも挑戦しました。「おしゃれな卓上カレンダーを作りたい」というイメージから始まり、市販の商品を参考にしながらデザインや仕様を試行錯誤。ホチキスの跡が目立たないようにマスキングテープで隠すなど、細部まで工夫を凝らし、利用者の皆さんが制作した紙を使用して 25 冊を完成させました。

農耕班の挑戦

農耕班は、畑で育てたサツマイモを販売。昨年は紅あずまをふかして販売しましたが、甘みが少ないとの声があり、今年はシルクスイートを採用しました。収穫後、ふかして味見をしましたが、期待した甘みが得られず、利用者や職員で新たな方法を模索。「スムージー」では物足りないとの意見が出たため、砂糖を振りかけてバーナーで炙る「サツマイモブリュレ」に挑戦しました。さらに、アイスをトッピングして見た目も華やかに仕上げ、販売することに決定しました。

当日の成果

当日、卓上カレンダーは準備した 25 冊がすべて完売。サツマイモブリュレも約 100 個が午後にはすべて売り切れ、大盛況でした。日中活動で利用者が作ったものが地域の皆様に受け入れられ、次のモチベーションへと繋がったことが大きな収穫です。

しかし、活動を通じて商品を販売するには、多くの知恵と工夫、そして熱意が必要です。今回の試行錯誤は「生みの苦しみ」そのものでしたが、完売という結果は班員全員の努力の結晶でした。これを糧に、今後も利用者とともに新たな挑戦を続けていきたいと思います。

（めいわ課長　中田　憲一郎）

□令和６年度愛光秋まつり　　　（根郷通所センター）

今年度の愛光秋まつりは、コロナ禍以来初めて根郷通所センターが開所され、利用者それぞれが祭りを楽しむことができました。

根郷通所センターでは、「i-koubow!」として陶芸班と木工班が出店に参加しました。売上は上々で、総額で５万円強に達したとのこと。嬉しいことに、地域に住む方々に多くの購入をいただきました。

（めいわ通所部所長　菊地　暁生）

□２つの　じりつ支援　　（リホープ）

『自立支援　自律支援』

同じ「じりつ」でも、その意味は異なります。ケアマネジャーとして私たちが何をすべきか、この言葉の意味をしっかりと考えて、グループで話し合ってみましょう。

ケアマネジャーの更新研修の一コマでのことです。私たちは「自立支援」という言葉を意識し過ぎているのではないか、という気づきがありました。グループ討議の中で、「あっ、そうだよな」と改めてその重要性に気づかされました。

それぞれの言葉の意味を調べてみました。

自立：他の援助を受けずに自分の力で身を立てること

自律：他者からの支配や制約を受けず、自らの価値観や理念に基づいて判断・行動できること。
自分のことは自分で決めて、自分の意思で行動や生活ができること。

「自立支援」とは、日常生活、健康・心理、社会とのかかわりなど、普通の生活が送れるよう支援することです。具体的には、自分でできることを増やしたり、できることをできる限り維持できるよう支援します。私たち職員が「自分が手伝ったほうが早い」「本人がやると時間がかかる」と考えてしまうと、それは自立支援には繋がりません。その方の能力を奪わないようにすることが大切です。

「自律支援」は、「自分らしく生きる」ことや、「自分で人生の選択をする」こと、つまり自己決定を支援することです。「認知症だから、知的・精神的な障害があるから、できない、分からない、決められない」と決めつけるのではなく、「本人ならどうするだろう？」という視点で支援することが求められます。

福祉の仕事は「自立」と「自律」の両方を支援することです。そして私たちは、「自律支援」にもっと意識を持って取り組んでいかなければならないと感じています。

（リホープ副施設長　麻生　知明）

□利用者について　（山王の家）

13 日、佐倉秋祭りが開催され、3 名の方が家族や友人、職員とともに出かけました。今年は天気も良く、昨年よりも人出が多かったように感じました。山車や神輿を見たり、屋台を何度も回って好きなものを探したり、値段を比べたりと、それぞれが祭りらしい雰囲気を十分に楽しんでいました。

祭りに参加せずに残った利用者にも、好きなお昼ご飯を食べようと声をかけると、嬉しそうに選んでくれました。発語が難しい方も、それぞれ紙に書いて 5～6 種類のメニューを提示すると、迷うことなく「寿司」の紙を選びました。テイクアウトした念願のお寿司をゆったりと堪能していました。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□**非常勤スタッフの活躍**　　　　（ワークショップかぶらぎ）

市内のベーグル店の飲料カップに添付するシールの印刷案件を受注できることになりました。この案件は、かぶらぎの非常勤スタッフが懇意にしている店とのご縁から生まれました。通ううちに店のスタッフと声を交わすようになり、印刷業を請け負っている話題がきっかけで見積りを出す流れに繋がったのです。

もちろん受注を目的に通っていたわけではありませんが、普段から自分のプライベートな時間の中でも、「これならかぶらぎで受注できるのでは？」といった思考があったからこその展開だと思います。

就労系の事業所では、非常勤職員の存在が現場を支え、盛り上げるうえで非常に重要な戦力となります。かぶらぎも同様ですが、“仕事を取ってきた”というケースは初めてで、その実績に嬉しさを感じるとともに、正職員としても気が引き締まる思いでした。

（ワークショップかぶらぎ主任　宮部　和樹）

□**季節の変わり目**　　　（ジョーの家）

以前に課題として挙げたように、入居者の暑さ対策が浮き彫りとなり、個別対応を行ってきました。今年は特に酷暑が続き、利用者個人での対策だけでは不十分で、体調不良に至るケースがありました。その際、職員の迅速な介入により、大事には至りませんでした。

10 月に入り、寒暖差が激しくなっている中で、夏の課題を振り返りながら、各利用者の健康状態の確認、室温の調整、暖房器具の使用に細心の注意を払っています。さらに、感染対策として、手洗いやうがい、マスクの着用を促し、利用者が安心して過ごせるようサポートを続けていきたいと考えています。

（ジョーの家　髙橋　健）

□**良い形になってきた？**　　　（よもぎの園）

よもぎの園では主に業者からの仕事を請け負い、作業を進めています。業者の「1 強他弱」という依存構造では、安定した売り上げを維持することは難しい状況です。そのため、この状態を打破しようと取り組みを続けてきましたが、ここにきて「理想に近い形」に手応えを感じられるようになってきました。

これまで、1 階と 2 階それぞれの作業室で異なる作業を担当していましたが、2 階の作業が減少する際には、2 階の利用者が 1 階に降りて作業を行うなど、柔軟な対応を余儀なくされていました。しかし、この形ではその場しのぎに留まり、売り上げを伸ばすには至りませんでした。

現在は、各フロアごとに安定した作業を確保し、それぞれのフロアで売り上げを出せるようになっています。また、「1 強他弱」の構造からの脱却が進みつつあります。この成果は、業者との信頼関係の構築があったからこそ実現したものです。

信頼関係を築くために、各業者を担当する職員は依頼された作業をできるだけ断らず、将来的な継続を見据えた対応を心掛けてきました。時には作業量がキャパシティを超えることもありましたが、それでも踏ん張り続けてきた結果です。

今後も、この「理想に近い形」を維持し発展させるために、風通しの良い職場環境をつくり、職員全員で思いを共有しながら取り組んでいきたいと考えています。

（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□ちょっと一息　（かけはし）

10月5日（土）、第27回愛光秋まつりが開催されました。かけはしも佐倉圏域事業部の一員として、出店のお手伝いに参加しました。

日頃、終わりの見えない相談業務に追われる相談員たちも、この日は肩の力を抜いてお祭りを楽しむ予定…のはずでした。しかし、「ちょっと待って！大忙しなんですけど！」という状況に。私たちは「フランクフルト」「わたあめ」「カクテルジュース」を販売しましたが、ありがたいことにお客さまが途切れることなく訪れ、開始から終了までフランクフルトを焼き、わたあめをくるくる回し、カクテルをシャカシャカ作り続ける忙しい一日となりました。お祭りを楽しむ余裕こそありませんでしたが、その分、多くの方々に喜んでいただけたことが何より嬉しかったです。

また、当日は担当ケースの方々ともお会いすることができ、普段とは異なる環境で新たな一面を発見したり、普段では聞けないお話を伺うことができたりしました。こうした交流は非常に有意義であり、お祭りならではの素晴らしい体験となりました。

いつか、佐倉圏域でも地域の皆さまと触れ合えるお祭りを開催し、楽しい交流の場を設けたい――そんな思いを抱かせてくれる秋まつりでした。

（かけはし所長　戸室　輝大）

□Aikohフォーラム「終活について考えよう。～今のうちからできる準備～」　（アシスト）

10月23日、南部地域福祉センターB棟研修室にて、法人理事であり弁護士の吉野智氏を講師に迎え、「終活」をテーマとした研修を開催しました。地域住民51名、職員を含めて総勢70名近い参加者で会場は満席となり、終活への関心の高さがうかがえる会となりました。

研修では、南部包括の事例を基に、テーマごとに吉野理事と南部包括・アシスト・かけはしの職員が議論を行う形式を採用しました。また、会場には配食サービスや緊急通報装置、「私らしく生きる手帳」（市高齢福祉課作成）、事業所パンフレットなどを展示した情報提供コーナーを設け、来場者の関心に応える工夫も施しました。

今回の研修では、吉野理事から「職員育成に協力したい」との申し出を受け、現場職員4名に準備から当日の役割分担まで任せる形で進めました。相談業務を抱える中での準備は大変でしたが、日程調整や打ち合わせを丁寧に行い、多くの来場者を迎えながら無事に研修を終えることができました。

吉野理事には毎回、地域に役立つテーマで講義を行っていただき、職員への心配りも欠かさず感謝の念に堪えません。

参加者アンケートより（回答39名、回収率76.4%）

「事例はわかりやすかった」

「一人であってもチームで支え合う世の中になると良いと思いました」

「公正証書遺言の作成で苦労しましたが、今日の話を聞いて作成しておいてよかったと実感しました」

今後も地域の皆さまに寄り添った内容で、より良い研修を目指していきたいと思います。

（佐倉圏域事業部長　近藤　美貴）

□愛光秋まつり参加　（はちす苑）

10 月 5 日、「愛光秋まつり」に 6 名のご利用者が参加されました。あいにくの雨模様でしたが、普段外出の機会が少ないご利用者にとって、大切で楽しいひとときとなりました。

当日は出店で売られていたおやつを召し上がりながら、猿回しを見て笑顔を浮かべるご利用者の姿が印象的でした。特に、普段は食事が進まないご利用者が、大きな「マンゴーパフェ」をぺろりと完食し、とても満足そうな表情を浮かべていたのが忘れられません。

また、現地でご家族と待ち合わせされ、一緒にお祭りを楽しまれた方もおり、ご家族との交流を喜ばれる様子が見られました。

雨の中でも、ご利用者にとって心に残る充実した時間となり、スタッフ一同も嬉しく思いました。

（はちす苑　苑長　安部　一義）

□地域の力　（南部地域包括支援センター）

10 月 5 日（土）、和田地区社会福祉協議会主催の「敬老のつどい」が、実に 5 年ぶりに開催されました。コロナ禍の影響で令和元年を最後に実施できていなかった本行事は、地域の皆さんにとって待ち望んだ再開でした。当日は約 100 名の住民が集まり、包括支援センター職員も参加してふるさと体操を一緒に行い、久しぶりに地域が一体となる温かな時間が流れました。

コロナ禍の 2 年前、包括支援センターが主催した地域ケア会議では、「コロナで何もできない」「人とのつながりが感じられない」といった閉塞感が漂っていました。感染への不安から一歩を踏み出せない状況が続いていましたが、その空気が大きく転換された今回の開催は、地域を元気づけたいという住民の皆さんの強い思いの結晶といえるでしょう。

運営を担った福祉委員の多くは、自身も招待される側の年齢層でしたが、「70 代はまだまだ若い。80 代もまだ現役」という力強い言葉が印象的でした。地域を再び元気にし、繋がりを再構築するのは、地域の力と一人一人の思いに他なりません。コロナ禍で失われた繋がりを取り戻し、改めて地域の力を感じた一日となりました。

（南部地域包括支援センター管理者　森　由美子）

□根郷福祉まつりでのお抹茶体験とゲートボール体験　（南部地域福祉センター）

10 月 6 日、「根郷ふくしまつり」が南部地域福祉センターA・B 棟を会場に盛大に開催されました。当日は総来場者数 733 名（スタッフ約 100 名を含む）が集まり、地域の賑わいを象徴する一日となりました。

A 棟 2 階の娯楽室では「お抹茶体験」が行われました。講師は、当センターのいけばな教室の先生と、お抹茶席「一華（いちげ）会」のメンバーが務め、来場者に日本文化の魅力を伝えました。特にスタンプラリーの一環として多くの子どもたちが参加し、「お菓子はいつ食べるの？」「茶器はどのように回すの？」といった純粋な疑問に先生が丁寧に答える様子が印象的でした。

一方、中庭では「ゲートボール体験」が行われ、こちらもスタンプラリーのコースとして子どもたちに大人気でした。ゲートボールを指導したのは、当センター利用者である「城ゲートボールクラブ」のメンバー。高齢化に伴いメンバー数が減少している現状の中、数名の方が協力してくれました。「子どもたちがゲートボールを体験することで、将来の競技活性化に繋がれば」と、クラブリーダーの期待も寄せられました。世代間交流を通じて地域の絆を深めた「根郷福祉まつり」。参加者全員が楽しみ、地域の新たな可能性を感じる一日となりました。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□根郷福祉まつり　　（佐倉市南部児童センター）

10 月 6 日（日）、毎年恒例の「根郷福祉まつり」が開催されました。今年は昨年より 1 時間延長され、11:00～14:00 の 3 時間開催。飲食販売も再開され、多くの来場者で賑わいました。

児童センターでは、スマイルクラブ（小中学生ボランティアクラブ）の活動が注目されました。今年は赤い羽根共同募金を復活し、募金者へ手作りのしおりを配布する取り組みを実施しました。このしおりは、8 月の活動でクラブのメンバーが作成したものです。職員や社会福祉協議会の方々と何度も準備を重ね、当日を迎えました。大勢の人の前での募金活動は初めてでしたが、子どもたちは「赤い羽根共同募金にご協力をお願いします！」と大きな声で呼びかけ、約 5,000 円の募金を集めることができました。

募金活動と同時に、スマイルクラブの過去の活動を紹介するボードも展示。写真や子どもたちの言葉が書かれた内容は、多くの来場者が足を止めて見入るほど好評でした。この結果について、社会福祉協議会の方々からも「短時間でこれだけ集まるのは珍しい」とお褒めの言葉をいただきました。

さらに、児童センターは他にも多彩なイベントで来場者を楽しませました。毎年人気の「割りばし射的ブース」では、中学生ボランティア 3 名が助っ人として活躍し、輪ゴムを拾ったり説明したりと奮闘。中庭メイン会場で行われた「青空ひよこタイム」では、ダンスや紙芝居を通じて来場者との交流が図られました。

今年のまつりには昨年を上回る来場者が訪れ、大成功のうちに幕を閉じました。終了後、子どもたちや職員は「来年はどうしようか？」と笑顔で語り合い、次回への意欲を新たにしていました。

（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□自分たちで考える、秋。　（学童保育所）

いつも新しい遊びを生み出している子どもたち。初めての遊びでは、ルールや世界観を自分たちで作り上げ、時には衝突しながらも、遊びの形を少しずつ更新していきます。

ある日、男の子数名から「机とジョイントマットを使って秘密基地を作りたいんだけど…」という相談がありました。室内には 30 名以上の子どもたちがいて、彼らが使いたい机は他の子が工作遊びで使用中。秘密基地を理想の形にするには高さのある机が必要で、スペースの確保も難しいと感じた彼らは大人に相談してきました。

「どうしたらできると思う？」と尋ねると、子どもたちはすぐに様々なアイデアを出しました。

「机を別の机に替えてもらえないか聞いてみよう！お引っ越しも手伝う！」

「他の遊びをしている子もいるから、机は 2 台までにしよう！」

「空気がなくなると危ないから、マットで全部をふさがないようにしよう！」

自分たちだけでなく、他の子どもたちが遊びやすい環境を考える姿に驚かされました。さらに、「忘れないように紙に書いておこう！」と、自発的に記録するなど、主体的な行動が見られました。

子どもたちが話し合いを通じて解決策を見つけ、互いに協力し合う姿は、大人が介入する必要がないほど頼もしいものでした。秘密基地づくりを通じて、創造力だけでなく、他者を思いやる心や問題解決力といった大切な学びを得る様子に、成長を感じた瞬間でした。

（寺崎学童保育所より）　　　　（学童保育所主任　齋藤　理江）